

[成果情報名] 県内河川におけるアユのエドワジエラ・イクタルリの保菌状況

[要 約] そ上期から成熟期までの県内河川のアユにおけるエドワジエラ・イクタルリ（以下 E. i.）の保菌状況を調べたところ、A 川では、徐々に保菌率が増加し成熟期に高い保菌率が見られたが、B 川では期間を通して低い保菌率で、成熟期での増加が見られなかった。河川によって E. i. の保菌率が大きく異なる状況が示された。

[部 署] 山形県内水面水産試験場生産開発部

[連絡先] TEL 0238-38-3214

[成果区分] 政

[キーワード] アユ、エドワジエラ・イクタルリ感染症

[背景・ねらい]

県では、天然遡上アユを増大させる施策の一環として、河川でアユ親魚を採捕して種苗生産に用いているが、平成 22 年度に県内河川で E. i. を保菌したアユが確認された。種苗生産における E. i. の防除が必要とされるが、使用する親魚の保菌状況について知見を得るため、そ上期から成熟期までの県内河川のアユの保菌状況を調べた。

[成果の内容・特徴]

1. E. i. 保菌アユが確認された最上川で、そ上期は河口において、それ以降から成熟期前まで 2 支流において、成熟期にはこの 2 支流の他に独立した 2 河川と最上川支流 1 河川を加えた計 5 河川において保菌検査を実施した。
2. 最上川本流河口で実施した 6 月では 0%(n=59)、A 川では、7 月 3.2%(n=31)、8 月 11.9%(n=42)、10 月中旬 22.2%(n=45)、同下旬 21.2%(n=85)の保菌率であった。一方、B 川では 8 月 0%(n=60)、9 月 6.1%(n=82)、10 月上旬 0%(n=64)、同中旬 0%(n=49)の保菌率であった（図 1）。
3. 成熟期の C、D、E 川についても保菌検査を実施した。凍結検体を用いた場合、生の検体の場合に相当する検出率に換算し、平成 22 年の A 川及び B 川の結果も合わせて図 2 に示した。昨年検出されなかった C 川について、6.1%で E. i. が確認された。また、D 川、E 川でも E. i. が確認され、それぞれ 3.6%、3.2%であり、いずれも保菌率は高くなかった。
4. これらのことから、E. i. を保菌するアユが存在する河川でも、河川によって当該菌の保菌率が大きく異なる状況が示された。

[成果の活用面・留意点]

1. E. i. のアユへの感染経路は不明であるが、そ上期のアユでは保菌が見られないことから、河川に定着して以降に感染した可能性が考えられる。
2. 種苗生産の前に種川のアユについて保菌状況をモニタリングし、保菌率の低い河川の親魚を種苗生産に用いることにより感染のリスクを減らせる可能性がある。

[具体的なデータ]

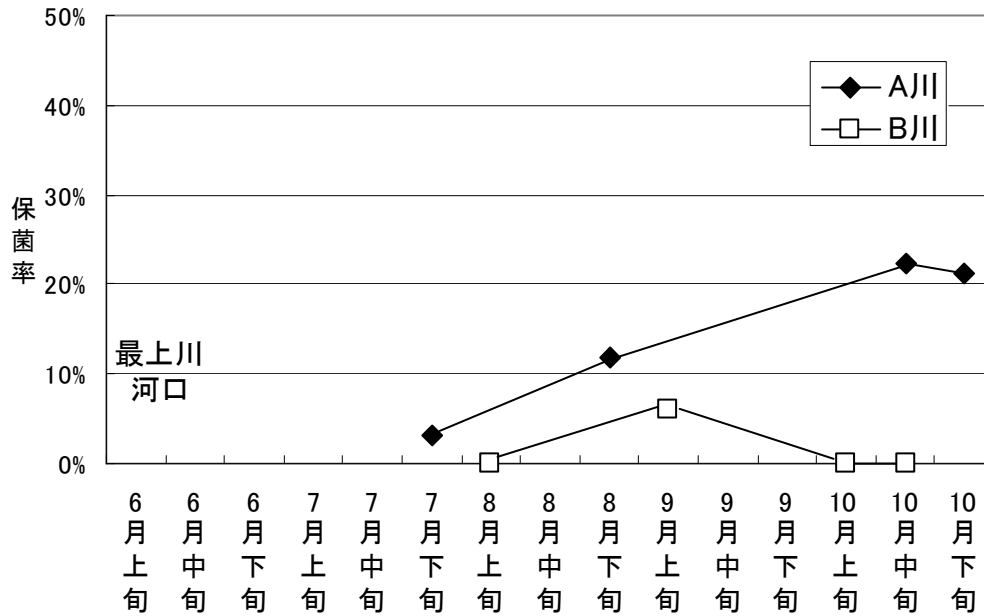


図1 河川に生息するアユの保菌検査結果

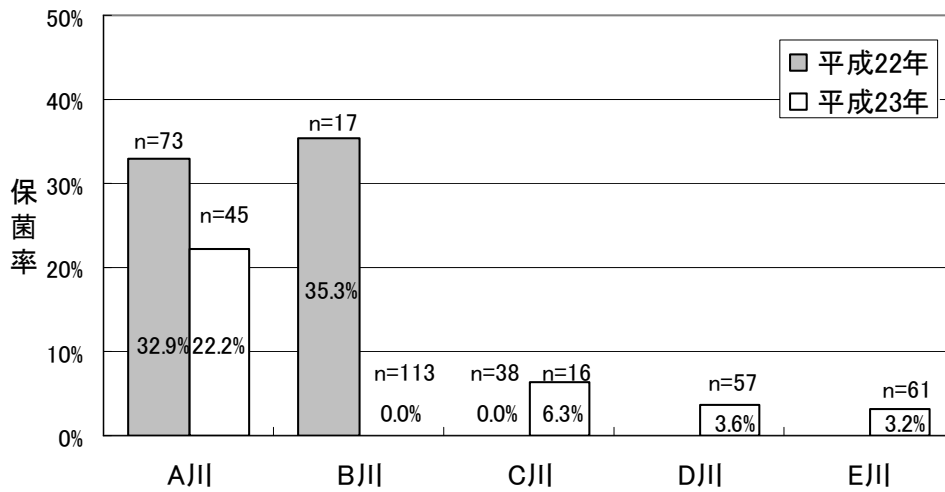


図2 成熟期のアユの保菌検査結果

[その他]

研究課題名：養殖衛生管理体制整備、アユ新感染症緊急対策

予算区分：受託

研究期間：平成22・23年度

研究担当者：大川恵子、粕谷和寿

発表論文等：平成24年魚病学会春季大会発表予定